

SUSONO

vol.4
[2018.9]



移住を決めたのは、
どうしてもやりた
い仕事があったから。

前橋市移住コンシェルジュはあなたの夢を応援します。

移住コンシェルジュ
鈴木正知




https://www.facebook.com/maebashijju/

Let's Learn 上州弁

「まあず、今年の夏は暑かったんねえ。」



葉山 三千子
はやま みちこ

本名・和嶋せい。1902年前橋市生まれ。15歳の時、姉の千代が作家の谷崎潤一郎と結婚したのを機に谷崎家に引き取られ、『痴人の愛』のヒロイン・ナオミのモデルとなる。映画『アマチュア倶楽部』に主演したのち、女優として活躍。

解説
「まあず」は「本当に・とても」といったニュアンスでよく使われる言葉。さらに「濃く」という意味を強調したいときには「なっから」を使う。言い切りの語尾には「〜んねえ」が付くのが定番。



歩いて帰ろう 線路脇の草生す砂利道 かつてなんでもなかった風景のなかで砂を巻き上げボールを蹴って遊ぶ子どもたち それは夏の陽炎が見せた夢



Instagram @susono_maebashi


前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。あなたに合った“前橋での働き方”が見えてくるかも!?

ハロー！WORK
まえばし

「デンキのミライにワクワクする」感動と喜びを生み出す価値創造カンパニー

株式会社 ソウワ・ディライト

社会インフラを担う建設業に於ける電気部門、電気設備工事業が主たる業務だが、ビジョン「デンキのミライにワクワクする」の構築や地域との連携事業を業界に率先して行っている。敷地内には倉庫の2階をリノベーションした公共空間「HANA Lab」や snow peak 社の「住箱」、屋上空間を創造した「ソウワの庭」を整備。また、気取らない優美さをコンセプトにした女性社員のチーム「KUROTSUBAKI」の発足や、ソーシャル事業部を設立し、地域や学生と連携した事業をスタートさせるなど、とにかく地域を代表する活発でイノベティブな企業だ。〈ライフ〉と〈ワーク〉が常に交差し合う「ライフ・ワーク・クロス」という独自の働き方の提唱も話題になっている。



協力 | 株式会社ソウワ・ディライト
〒379-2121 群馬県前橋市小屋原町 722-1

人の状態に寄り添った「○○なスポーツ」を定義し運営している。小学校低学年においては多種目の運動を経験させることで、高学年になる頃には自分が自身の経験値で分かっている。大切なのは基礎体力作りや他人とのコミュニケーションを通じて自分が暮らす地域をもっと好きになってもらうこと。ご心配の方には年齢に合ったスポーツをすることで暮らしにも孤立しない環境を作っていく。こんな「総合型地域スポーツクラブ」が、今見えてくる景色だ。

鈴木正知 (すずき まさととも)

東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠イースタンキャンプ場管理人 インタープリター担当などを経て、2006年前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年より、前橋市の移住コンシェルジュに就任。

ユニーク U-29ピコル

フラワーショップ花園 デザイナー
斉藤 翔さん (26)

故郷は、青森県むつ市という本州最北端の駅のあるまち。宇宙航空力学が学びたかったので、県外の大学進学を目指していました。その中で、建築で宇宙に関われたらと思い始め、縁あってやってきたのが前橋工科大学でした。建築の設計やデザインの勉強をし、卒業後も大手建設会社で3年ほど勤務しましたが、建築をつくることより幸せに使うためのお手伝いがしたくなってきたんです。そこで、地域の活動でお世話になっていた花屋さんでこの春から働くことを決めました。住み込みで、つまりゼロ距離通勤(笑)。新たな人生が幕を開けました。こういう自分を受け入れてくれる前橋がやっぱり好きです。宇宙飛行士になった気分、これからもっと色々なことに挑戦していきます。

取材メモ
インタビュー後半に「勝っても負けても応援してくれる人をもっともっと増やしたい」という一言がある。実は僕は県外出身者なのだが、偶然にも全く同じことを考えていた。群馬のまわりには、長野、新潟、埼玉など、まちを挙げて熱狂するサッカークラブがある。さらに、とあるプロ野球ファンから聞いた「勝ち負けなんかにどうでもいい！試合を見て応援するのが楽しいんだから」という名言も僕のがググッとあがるはずなのだ。とは言っても、「好きになる」としてそんなに簡単ではないことぐらいよくわかってる。移住先のまちについても同じだろう。あれこれアピールされてもピンと来ないものはピンと来ない。一方で「縁」というものには凄まじいパワーがある。これを大切にさえできれば、物事はいい方向へ進む。これからも「縁」を感じる susono 作りを心掛けていきたい。(ライター・竹内 麗人)

移住コンシェルジュ便り

地域におけるスポーツの在り方は様変わりしている。地区の運動指導員もかつては体育委員と聞いていたが、今ではスポーツ委員と呼ばれる。その受け止め方も違ってきている。私自身は24歳まで現役でサッカーを続けていた。子どもを持つてからは、多くの親がそうするように一緒にボール蹴りから始める。地域の少年サッカーチームに入れて週末の練習に足繁く通った。やがてお父さんのコーチを始めてからは、審判講習、試合の送迎、クリスマス会と楽しい時間を過ごしてきた。その一方で、練習内容やチームの慣習、指導者によっては、運動の楽しさや仲間との感動の共有とは逆の方向に向かっている。嫌い、好きで始めたはずのスポーツが嫌いなようになってしまった。子どもも少なからずいた。競技スポーツには、勝ち負けを意識しすぎることで本来の大切な意味を失ってしまう側面がある。特に地域におけるスポーツ指導は、勝ち負けではなく、スポーツの持つ最も大切な意味を理解する必要があるように思えてきた。今取り組んでいるのが、その考え方を前面に出した「総合型地域スポーツクラブ」だ。通常のだけのスポーツではなく、「見るスポーツ」も応援するスポーツ。子どもからお年寄りまで、年代や個性の状態に寄り添った「○○なスポーツ」を定義し運営している。小学校低学年においては多種目の運動を経験させることで、高学年になる頃には自分が自身の経験値で分かっている。大切なのは基礎体力作りや他人とのコミュニケーションを通じて自分が暮らす地域をもっと好きになってもらうこと。ご心配の方には年齢に合ったスポーツをすることで暮らしにも孤立しない環境を作っていく。こんな「総合型地域スポーツクラブ」が、今見えてくる景色だ。

めぶく 前橋市

発行日：平成 30 年 9 月 5 日
発行：前橋市役所 政策部 未来の芽創造課
〒371-8601 群馬県前橋市大手町二丁目12-1 TEL 027-898-6513 FAX 027-224-3003

ライフスタイルを通して 前橋の魅力をSNSで発信

ザスパクサツ群馬：DF 川岸祐輔選手



「オフの日は趣味のカメラを持ってオシャレなカフェを巡ったり、前橋公園でのんびり過ごしたり、行き先のないドライブをしたり、妻や友達と大好きな前橋を気ままにぶらぶらする」のが一番のリフレッシュになるそうだ。登山も好きで赤城山には何度も登っているという川岸選手。「前橋は自然と都市の調和が、本当に最高です。最近ハマっているのは、広瀬川を散歩すること。まちの中に水量豊富であるのに綺麗な川が流れているなんていいですよね。先日姪と一緒に、まちなかにある前橋ブラザ元気21の「子育てひろば」や遊園地「るなばあく」へ出かけたときには、子どもと遊べるスポットの多さを実感しました。いつの日か前橋の観光大使になることを夢見て（笑）、これからも写真をアップしていきます。前橋移住の参考に、ぜひフォローをよろしくお願います！」

Profile | 川岸祐輔（かわぎし・ゆうすけ） 1992年前橋市生まれ。Jリーグ・ザスパクサツ群馬所属のプロサッカー選手。前橋育英高校から駒澤大学を経て、2015年ザスパクサツ群馬に加入。プライベートでは同じ前橋育英高出身でモデルの鶴田真梨と2017年に結婚。チームきってのインスタグラマー。



Instagram @kawagishi0526

移住は、人生の チャンスボール かもしれない。

「4月いっぱいまで、鹿児島県のある町役場の職員として丸9年働いていました。農林振興課というところで、水産業や林業の補助金、雇用促進、新商品開発などに携わっていました。いま思うと、鹿児島生活ではとにかく飲み会が多かったですね。同僚や町民と打ち解けるためには飲み会で自己主張しないといけない雰囲気があったので、「どこ生まれ？」と聞かれて違うまちっというだけで仲間になりにくい部分もありました。ところが、前橋や群馬の方々は、本当に優しい人が多いですね。受け入れる文化があるのか、事務所の中でも、ゲームの時にサポーターさんと話をしても、みなさんフレンドリーに接してくれて、壁をあまり感じないですね。今年はこちらでNHKの大河ドラマの舞台ということもあってか、鹿児島にも興味を持ってもらえている気がします。」

「地元と同じように自然が多い。山に囲まれた風景が鹿児島にそっくりで驚きます。本当にそっくりなんです（笑）。まわりの山々を見ていると地元にいるような気分になって落ち着きますね。ちょっと車を走らせれば田畑が広がっていて、見晴らしがいい。カエルやセミが鳴いていたりして。前橋って、最初は洗練された

また一人、新しい前橋市民が増えた。その名は、山下琢磨さん(24)。サッカーJ3に所属するザスパクサツ群馬(以下、ザスパ)のフロントスタッフとして働くため、鹿児島からやって来た。根っからのサッカー好きで、転職の機会を探っていたのだそう。魅力的な仕事は、人生を動かしたくなる。今回の移住は、きっとその好例の一つなのだろう。入社数ヶ月。ようやくこのまちでの仕事や暮らしに慣れてきたという山下さんに、前橋移住のことを訪ねてみた。

都会なんだろうなと思っていました。もつと電車やバスが通っていて、車要らずのまちを想像していたのですが、むしろ今ではものすごく自然豊かなところというイメージになりました。鹿児島でやっていた地域おこし協力隊の中に偶然にも群馬出身の方がいらっしやうって。その方から、群馬はうどん、そば、スパゲッティなど種類の店が多いと聞いていました。実際に来てみると、種類のお店の看板の、まあ多いこと多いこと(笑)。もともと、前橋商業や前橋育英を筆頭に、群馬はサッカーが強いというイメージを強く持っていましたね。5歳からサッカー少年だった僕は、サッカーが大好きでよく試合や情報をチェックしていました。僕たちのチームに在籍している松下裕樹選手など、高校選手権で活躍していた選手のことばすこよく覚えていきますね。」

目の前はシュート 打つしかない状況

そんな山下さんは、営業部に所属。ポンスー企業に協賛のお願いにまわったり、行政を通じてザスパクサツ群馬をもつと知ってもらうために、ホームタウン担当として県内の市町村を駆けめぐっている。

「同じ部の先輩と一緒に、各自自治体や地元企業・スポンサー様へご挨拶に伺うところから始まりました。群馬県の全市町村を対象に、地域貢献しながらザスパクサツ群馬をもつと知ってもらうのが仕事です。プロのサッカークラブとして、サッカーやプロスポーツを通して地域に貢献することが大切だという考えから、子ども向けのサッカー教室や、スポンサーと協力し、栄養講座や運動講座を取り入れた高齢者向けの健康教室などを月に何度も実施しているの、こうした活動に足を運んで勉強させてもらっています。最近では、ふるさと納税を増やすことにも力を注いでいます。こうした仕事するとき、僕の前職が町役場の職員だったとい

で、ゴールキーパーがいらないところにボールが転がっているような状況。こうなったらシュートを打つに決まっていますよね！(笑)

移住を決めた当時、町役場からの転職には周囲の皆さんからとにかく驚かれましたよ。町長からも、本当かと声を掛けていただいたほどです。それでも背中を押してくれた今までお世話になった方々や、新しく仲間に入れてくれた方々に恩を返すためにも全力疾走し続けたいですね。」

それに、子どもでも大人に負けないハングリーさが印象的でした。どんなことも楽しみながらやる。好きなことをしながら人生を送る。生活の一部にサッカーがあるという文化がここ前橋にも根付いていくといいなと思っています。そして何より、このスタジアムを常に満員にすることが目標です。まだまだザスパを知らない方がいっぱいいるという中で、勝つても負けても応援してくれる人をもつと増やしたいんです。そのために、サッカーを通して、大人から子どもまで交流できるようなことを企画してみたいですね。サッカーという「私でしかない」という人も多いですが、人数やルールなど条件を何か変えてみれば可能性は一気に広がるんじゃないかと。だってサッカーは、たった一個のボールで世界中の人々とコミュニケーションがとれるスポーツなんですから。

大学を卒業して町役場に就職する前の一年間、市役所の臨時職員となった山下さんは、サッカー本場の地、ブラジル・サンパウロに派遣され、地方新聞の記者兼カメラマンの仕事を務めていた。「仕事のときも、そうじゃないときも、ひたすらサッカーばかりやっていましたね。サッカー人口がものすごく多かったです。辺りを見回せばそこら中でサッカーをやっているんです。ずば抜けて上手い子なんかは、翌週突然いなくなっちゃったと思ったら、プロクラブのアカデミーにスカウトされていたりするんですね。」

まだ移住して数ヶ月というところではありますが、本当に充実した時間を過ごすことができている。プロサッカーの仕事に携わっていることがまるで夢のようです。前橋は住み心地よいまちで、この上ないことですよ(笑)。オンオフ通して、これからもここで生活をを楽しみたいと思います。」

取材協力：ザスパクサツ群馬

プロスポーツを応援できる幸せ

豊かな自然があることや教育や医療の環境が充実していることのように、「プロスポーツを応援できる環境がある」ことは前橋が誇る暮らしの魅力のひとつ。地元のプロスポーツクラブの活躍は、市内のスポーツ振興や地域の活性化に繋がるほか、ファンや子ど

もたち、多くの市民に夢と感動を与えてくれる。そして、何よりも地元クラブに声援を送る喜びは世代を超えてまちをひとつにすることができる。地元クラブの存在があることで、多くの市民がここで幸せを感じ、この地域を愛する。「だれが何を言おうとこのチームが好きだ」「ここで生きる誇りだ」そんな想いが前橋市の未来に繋がっていく。前橋市はこれからも、大切な地域資源であるプロスポーツチームの挑戦を応援し、共に戦っていく。

移住を決めたのは、どうしてもやりたい仕事があったから。

山下さんのおすすめ

ホンマチ 2121 カフェ (HON-MACHI 2121 CAFE)

群馬県前橋市本町 2-12-1 (前橋ブラザ元気21)



前橋ブラザ元気21の1階にオープンしたばかりの「ホンマチ 2121カフェ」。パスタ、カレー、パン、ライスの4種類から選べる「2121ランチボックス」は彩りも鮮やかで、持ち帰りもOK。ランチにもまち歩きの一休みにも気軽に利用できる、カジュアルなカフェです。店内のモニターではザスパのアウェイ戦を観戦することができ、ザスパサポーターの新たな憩いの場所になりそう。



前橋市はふるさと納税で地元クラブを応援できるコースを設定。ザスパクサツ群馬との連携事業「全ホーム戦小学生無料招待」にも活用した。